

宇宙に挑む 兵庫の企業力



最先端の切削機械が並ぶ工場。佐藤が「下町」の仕事を好きでいる。その仕事を生かすために、佐藤は技術を磨き、それを活用する。佐藤は「下町」の仕事を好きでいる。その仕事を生かすために、佐藤は技術を磨き、それを活用する。

人類にとって「最後のフロンティア未開拓地」とされる宇宙との距離が、平成時代にはぐっと縮まった。太陽系や生命の起源に迫るため探査機が打ち上げられ、日本独自の測位衛星も本格運用が始まった。次の時代、宇宙利用はさらに加速する。その最先端を走る企業が兵庫県にも。(田中陽一、段 貴則)

無人トラクターの受信機開発



岸本信弘社長



「みちびき」で精度を上げる自動運転のイメージ

広い農場をトラクターが悠々の位置を計測しながら走る。無人トラクターの実験風景だ。動きはスムーズだ。技術の肝は「誤差数%」という世界屈指の高精度で位置を割り出す受信機。社員が作った準天頂衛星「みちびき」の尼崎市のメーカー「マセラニシステムスジャパン」が、2015年から2年がかりで完成させた。

たつの×最先端の切削技術

宇宙に挑む企業を描いた池井戸潤さんの小説「下町ロケット」を地で行く企業は、西播磨にもある。たつの市郊外にある佐藤精機たつのテクニカルセンタ1。最先端の切削機械が整然と並ぶ。「若者が都会に出て行く地方都市だからこそ、ここで挑戦したい」。佐藤精機社長(60)が率いる従業員は、姫路本社と合わせて45人。それでも、あらゆる素材から「一点もの」重要部品を切り出す技術力は「宇宙品質」を誇る。同社は、人工衛星を打ち上げるH2ロケットに携わり、20年度の初号機打ち上げが計画されるH3ロケット向けに独自のボスターを社内に掲げている。航空・宇宙事業を手掛ける企業は県内各地にある。佐藤社長は「西播磨にも関連企業を集積を生み出し、次の時代は宇宙産業を兵庫の地場産業にしたい」と秘めた構想を明かした。尼崎の下町から、緑豊かな西播磨から、宇宙に挑む。

下町ロケットの話は
身近で進行しています。
その一翼を将来に
かもし取せんぬ

高精度の位置測位は「型無人機ドローン」を活用した。高齢化や後継者不足が深刻な農業分野に限らない。既国内外の100社以上から注文が入り、受信機を搭載したトラクターは量産段階に入った。当初の大きさは約10万円で高価だったが、新時代の早い段階には「1万角、1万円以下」にする計画だ。

ロケットの心臓部品製造

創業者のDNAを受け継いだ。「下町ロケット」が原作のテレビドラマを意識し、20年度の初号機打ち上げが計画されるH3ロケット向けに独自のボスターを社内に掲げている。航空・宇宙事業を手掛ける企業は県内各地にある。佐藤社長は「西播磨にも関連企業を集積を生み出し、次の時代は宇宙産業を兵庫の地場産業にしたい」と秘めた構想を明かした。尼崎の下町から、緑豊かな西播磨から、宇宙に挑む。